『命の大切さ』

群馬県

前橋育英高等学校　二年

　数年前にニュースで見た悲惨な事故を今でも思い出す。

　その事故は、四年前に島根県で起きた。集団登校中の児童の列に軽トラックが突っ込み登校時の見守りをしていた男性と小学二年の児童が被害に遭った。

　見守りの男性が庇ったおかげで児童は助かったが、男性は亡くなった。男性は自分のほうが怪我が酷いにもかかわらず、最後まで児童に「大丈夫か」と声をかけて気づかっていたという。

　これだけでもとても悲しいことだが、この事故にはもう一つの事故が関わっていることを知った。

　それは、この男性は現場近くで一九八三年に、同じようにトラックが突っ込む事故で次女を亡くした遺族だったということだ。次女も今回の児童と同じ小学二年だった。

　亡くなった男性は、同じような事故が起きないことを願い、孫が小学校に入学するのを機に、地域の通学の見守り隊に加入し、児童を学校まで引率したり、安全に登下校できるように歩道の掃除をしたり、信号機の設置などを行政に要望したりと見守り隊の活動に全力を尽くしていた。

　それほど交通事故撲滅のために頑張っていた方が交通事故で命を落とすとは、なんと辛いことだろう。

　私はこの事故をニュースで知ったとき、何十年の時が経っても、どんなに車の性能が良くなっても、このような事故が繰り返し起こっていることを残念に思った。

　どんなに時が経っても飲酒運転やスピード違反での事故が後を絶たないのは、全国各地で毎日起こっている事故のニュースを見ても他人事だと思って、言葉では言い表せないような被害者の辛い気持ちを理解しようとしないからではないか。

　先日、私の学校に、「公益社団法人にいがた被害者支援センター」から、中曽根えり子さんという被害者遺族の方が来てくださった。中曽根さんは二十年ほど前に当時小学生だった息子さんを下校途中に交通事故で亡くされたそうだ。

　中曽根さんは、事故の悲惨さや事故後の被害者遺族の気持ちなどについて詳しく話してくださった。

　中曽根さんによると、事故後一年ほどは家族が会社や学校へ行くような日常が戻ってきても、何の気力もなく、子ども達の食事作りや世話も行えず、家から外出することもままならない程の精神状態で、そのころの記憶はほとんどないという。

　このような精神的にダメージを受けている中曽根さんに、追いうちをかけるような出来事が次々と起こる。

　例えば、いろいろな宗教の信者の人からの勧誘やマスコミの、人の気持ちを踏みにじるような取材や誤った報道などである。

　一方で、被害者遺族にとってありがたかった支援もあった。子ども達の学校が、即座に事故の正しい情報を保護者達に伝えてくれたことは、憶測や噂がひとり歩きすることを防ぎ、同級生や保護者、先生から温かく見守ってもらえたおかげで、子ども達を安心して学校へ通わせることができたそうだ。

　このような被害者や被害者遺族に起こることはニュースで見ただけでは分からなかった。

　私は、これまで事故や事件のニュースを見ても、その時だけ可哀想や悲しいことだなと思って、すぐに忘れてしまっていたが、今回の講演を聞くことによって、他人事ではなく自分の事のように考えることが大事だと思った。